

2019/03/31

## 「土に帰るとは」

アダムとエバは、神から「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記 2:17）と言われていましたが、食べてしまいました。しかし、二人は実を食べたことで神の命令に背いたわけではありません。それは二人が「神と異なる思いを抱いた」ところから始まっていました。その時、人は神との結びつきを失い、その関係が壊れてしまったのです。それは、神のいのちによって人が造られ、神と一つ思いで存在するものとして造られていたからです。神と異なる思いを持つことで神との関係が壊れたため、人は死んだものとなったのです。

不安のために身を隠したアダムとエバに神は「あなたはどこにいるのか」と呼びかけ、ようやく姿を現したふたりに、神はこれからのことを告げ、最後に次のように言われました。

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」（創世記 3:19）

神はこの言葉によって、私たちに何を伝えようとしておられるのでしょうか。

### ■人は何を求めて生きているか

「人は何を求めて生きているのか」という問いに対して、心理学はまず現実の事象を見て「この事象が起きるには〇〇であることが必要」という条件を考えます。そして、その条件が生まれた理由を探るのが哲学です。勝手な発想ではなく、学問として、きちんとデータを取って調べていくわけです。

その結果、現在は、人の持つ願望は、「愛されたい」という願望と、「生きたい」という願望の二つに集約されることがわかっています。そして、これらの願望が生じる条件として、「愛されたいと思うのは、愛される喜びを知っているから」「生きたいという願望を持つのは、永遠に生きることを知っているから」という前提にたどりつきました。甘いものを食べたことがあるから、「甘いものが食べたい」という願望が生まれるのであり、甘いものを知らなければ、食べたいとは思わないということです。

人は、無条件に愛されること、永遠に生きることを知っている……この本質を心理学・哲学では、永遠と名づけました。つまり、人の本質は永遠であるということです。

神学は、この前提に対して聖書を通して、「人が永遠という本質を持っているのは、私たちのいのちが神のいのちによって造られたからである」と解き明かしています。

「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」（創世記 2:7）

「いのちの息」の「いのち」は三位一体の神のいのちを指し、「息」は「霊・魂」を意味します。愛であり永遠でもある神のいのちで造られた魂を持っているために、人はその本質において愛と永遠を知っているのです。私たちは本来神と結びついて、いつも愛され、いつまでも生きる喜びの中で生きていました。しかし、神との結びつきを失ったために、その補給源を失ってしまったのです。これが「死」ということです。

心理学や哲学は、人が「愛されたい」「生きたい」という願望を持っていることは突きとめました。その理由まではわかりません。しかし、神学は、その理由を聖書に見出しています。それは、人が神のいのちで造られているからです。

しかしながら、どんなに求めても、神との結びつきを失ったこの世界では、この「永遠」という願望がかなえられることはありません。神は永遠であり自由です。この世界は有限で制限があります。ですから、この世界では可能性を追求することしかできず、たとえ可能性が達成されても、それは自由や永遠とは違います。そのために魂は満足できず虚しさを覚えて、快樂や安心を求めて生きています。人が自由を求め、可能性を追求するのは、神のいのちを持っているからです。

さて、そのような状態に陥った人間に対して、神は「あなたがたは土に帰る」と言われました。それは、どのようなことを意味しているのでしょうか。

## 1. 人生には終わりがあ

誰の人生にも終わりがやってきます。その時、いったい何を残せば良いのでしょうか。エジプトの王は、この世で得たすべてを死後の世界にも持っていかうとして、巨大なピラミッドを作りました。しかし、今それらのほとんどは盗賊に盗まれ、何も残っていません。誰でも死ぬ時は一人です。天国には、この世で得たものを何も持っていくことはできません。私たちが天に持っていくことができるのは神を愛する心だけです。その心だけが唯一の宝なのです。神への信頼こそが私たちの財産になるのです。イエス様は、タラントのたとえを通して、神から預かった信仰を使い、この地上で神への信頼を増し加えることの大切さを教えておられます。

私たちの本質は神のいのちであるため、誰もが「愛されること・生きること」を求めています。この「神を求める運動」のことを「信仰」と言います。つまり、すべての人は「信仰」を持っているのですが、この世界では神が見えないために、多くの人の「信仰」は神に向かうことなく、別のものに置き換えられてしまっています。本当は何を求めているのかわからないまま「信仰」はさまよい、可能性を追求するようになり、いくら追求しても達成しても魂は満たされず、それをごまかすために生きるようになってしまっています。

神は「あなたは土に帰る」と教えることで、あなたの人生には終わりがあるのだから、何が大切かを考えて生きなさいと語っておられるのです。「神の国と神の義を第一に求めなさい」と神は言われました。大切なものは何かを考え、魂が神を求めていることに気づいて、神を信頼する信仰を成長させることを求めましょう。

## 2. 人は止まることはできない

土から出て土に帰るとは、ゴールを目指して人は動き続け、生涯止まることはできないということです。私たちは神との関わりを失ってしまったことで、永遠を失い、時間というものにしばられて生きるようになってしまいました。その結果、常に時間に追われて結果を要求され続け、疲れ果ててしまっています。すると魂は静止するものにあこがれを抱くようになります。音楽やドラマや写真といった時間から切り取られた世界にあこがれを抱くのです。それが永遠へのあこがれです。永遠とは静止であり、人はせめて思いの中で止まろうとし、楽しんで現実に戻ることを繰り返しています。現実の世界で、永遠に動かないものは死しかないからです。

この世界でただ一つ動かないものは神です。キリストは昨日も今日もいつまでも変わらないと聖書は教えています。神だけが、私たちを時間から引き上げてくれる唯一の方なのです。私たちに、安らぎ、安息、永遠を与えることができるのは神だけです。神が差し伸べておられるその手をつかむなら、あなたは神によって引き上げられます。

## 3. 現実に目を向ける

神は、私たちが土に帰るまでは「顔に汗を流して糧を得る」と教えています。それは、私たちは夢の中で生きるわけではなく、現実にしか生きられないことを教えています。若者は夢を見、歳を取ると昔の思い出にひたって、その中で安心を得ようとしてしまうものですが、そこに幸せを見出そうとするのではなく、現実を見るように神は教えておられるのです。

では、現実とはいったい何でしょうか。デカルトは「我思うゆえに我あり」と、「自分がここに存在することだけはまぎれもない現実だ」と言いました。目に映るものはまやかしかもしれませんが、少なくとも自分がここにいるということは現実です。つまり、他の人のことではなく、自分自身の現実に目を向けることを考えればよいのです。

### (1) 罪に苦しんでいる

あなたが、自分の罪に苦しんでいることは現実です。苦しんでいなければ、自分の罪を知られたくない、隠したいとは思いません。聖書は、「罪を犯さない人はいない」「他の人の目の中にあるちりには気づいても、自分の目の中にある梁には気づかない」と語り、自分も罪人なのだから、人をさばく資格はないと教えています。正しいことがわかっているにもかかわらず実行できず、それをどうすることもできない——それが私たちの現実です。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」(ローマ 7:15-19)

## (2)死におびえている

病気になったら、生きようと必死になります。自分が手にしたものを失うことは恐怖です。それを人に知られないように立派な自分を演じて生きているかもしれませんが、本当は死におびえているのです。

## (3)人の目を恐れる

私たちは、自分がどう思われるか、人の評価が気になります。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

(ローマ 7:24-8:1)

「罪に定められることはない」とは、「神との結びつきを失うことはない」ということです。自分の現実を見ると、私たちは絶望を感じます。けれど、その時、イエス・キリストはこの絶望から私たちを救おうとしてくださったのだと気づくことができれば幸いです。

パウロは、自分自身の罪に絶望した時、絶望にこそイエス様がおられると気づきました。「私の罪は赦されている。私は神とつながっている。神と私を引き離すことができるものは何もない。」と、パウロは絶望を通してイエス・キリストの十字架を知ったのです。

私たちも自分の現実を見て、それを引き受けることができれば、唯一の救い主キリストが見えるようになるのです。これがまことの希望です。それをごまかして、間違った方向に進もうとすることが、私たちにとっての誘惑です。

神は、アダムが現実を見て神を求めることができるように、エデンの園を追放なさいました。神が二人をエデンの園から追放したのは、決して罪の罰ではありません。神を見ることができなくなった人間が自分の現実に目を向けて、キリストを知るようになるためです。

絶望をしっかり見れば、希望を見出すことができます。「土から出て土に帰る」という絶望に目を向けるなら、「光は闇の中で輝く」という御言葉の通り、キリストの十字架が見えるようになるのです。この福音を教えるために、神はアダムに「あなたは土に帰る」と言われたのです。